

# 矢作川下流域におけるアユ産着卵の継続調査

\*小野田幸生（豊田市矢作川研究所）

## 1. はじめに

アユは年魚であるため、その資源量は昨年度の産卵の多寡から影響を受ける。また、魚類はアユを含めて初期減耗が多い分類群であり、資源量の推定には初期減耗に着目した調査が重要となる。アユの産卵期の盛期は9～11月にかけてと報告され、矢作川においてもアユ産卵場の調査は、10月末から11月の産卵盛期に行われることが多かった。ただし、アユの長い産卵期のうち、次年度の資源量に貢献するのは、産卵期の後期に産卵された個体との指摘があり（高橋・東，2016）、産着卵がいつまで見られるのかを明らかにする必要がある。矢作川のアユ流下仔魚を調べた山本（2025）は、その消長からアユの産卵が12月中下旬まで継続することを推察した。しかしながら、矢作川においてアユの産着卵がいつまで確認されるのかについて調べた例はなく、アユ資源量を推定するための重要な情報が不足している。そこで、本研究ではアユ産着卵を継続調査し、いつまで確認されるかを調査した。

## 2. 方法

調査地は間野・小野田（2025）を参照し、明治用水頭首工下流における主要なアユ産卵場と考えられる5地点（葵大橋直上、東名高速の橋の下流、天神橋上流、愛環鉄橋上流、日名橋上流）を設定した。調査地点で2日間をかけてデータ収集を行い（約1時間/地点）、2024年10月17日から2025年1月7日まで、1週間ごとに調査を行った。但し11月初旬は、降雨に伴う高濁度のため調査を行わなかった。

データとして、既往研究に準じて、アユ産着卵（有無、未発眼卵/発眼卵）と物理環境（土砂の粒径、シノ貫入深、水深、流速）を収集した。

## 3. 結果と考察

アユ産着卵は2024年10月17日から2024年12月23日まで確認された。例年のアユの産卵盛期である11月初旬のデータが無いものの、それ以前には未発眼卵が多く、それ以降には発眼卵が多い傾向だったことから、本研究では、アユの産卵初期から産卵後期までを追跡できたと考えられる。

場所と調査年は異なるが、1986～2000年の四万十川のアユの孵化推定日の終了日は12月下旬から翌1月上旬にかけてであり（高橋・東，2016）、本研究と同様の結果が報告されている。

本研究の結果では、未発眼卵は2024年12月3日を最後に確認されなかったことから、アユの産卵は12月初旬まで継続したと考えられる。山本（2025）が推定した12月中下旬までと比べると早期に産卵期が終了したが、2024年は2023年よりも12月初旬の水温が低く、2023年の12月中下旬と同程度だったことが影響していると考えられる。

## 謝辞

矢作川漁業協同組合には、現地調査に際して便宜を図って頂きました。豊田市矢作川研究所の諸氏には調査地点の情報やデータ整理及び討議でお世話になりました。ここに記して深謝いたします。

## 参考文献

- 間野静雄・小野田幸生（2025）矢作川研究，29：33-38.
- 高橋勇夫・東 健作（2016）天然アユの本．築地書館.
- 山本大輔（2025）矢作川研究，29：1-5.